



図書館クイズ:
ディック・ブルーナ作の「ミッフィー」はもともとオランダ語では「ナインチェ(うさちゃん)・ブラウス(ふわふわ)」でした。では日本で1964年に出版された絵本ではなんとよばれていたでしょう?

No.27 学校図書館 司書だより

2017年3月



本と読書

「本は
コミュニケーションの道具」
市原 由佳子

読み聞かせて一番大切なことって何だと思えますか? 子どもの教育のためでしょうか? 私は子どもだけのためではなく親子の一番のコミュニケーションの道具だと思っています。

自分の子ども達に本を読んでいる時に感じたのですが、親がよかれと思って読む本と、子どもが読んでほしがる本って何でこんなに違うんでしょうかね。

我が家の場合、三人それぞれにお気に入りの本がありました。長女は「うしろにいののだあれ」、次女は「おおかさんがおかあさんになった日」、末っ子の長男に関しては「サンドイッチ・サンドイッチ」という、ただサンドイッチを作る手順を紹介している本でした。

一度読んでしまったら二度と読まないことも多い大人と違い、子どもはその絵本の世界に何度だって入って行くことができるんですね。もう一緒にその世界に飛び込んで毎回サンドイッチを作るしかないですよ。今はもう、自分達で図書館から本を借りてきて、三人とも好きな本の世界に入り込んでいる我が家ですが、本でのコミュニケーションは続行しています。先日行われた

ビブリオバトルで私が紹介した「ミッケ」もその一つです。誰か一人がリビングで見始めると、いつの間にか家族全員で探すのです。楽しいですよ。私が子どもの頃好きだった「エルマーのぼうけん」シリーズの三冊に息子が今夢中なので、その感想を言い合うのもとても楽しいひとときです。

私は、自分が子どもの頃に両親に読み聞かせをしてもらった記憶があまりありません。自営業の両親はいつも忙しそうでした。三歳上の兄がかなりの読書家で、その影響で私も読書が大好きでした。夕飯は家族全員が揃うので、その時に好きな本の話をしたり、新しい本をねだったりした覚えがあります。又、祖母はよく昔話の絵本を読んでくれました。これも今では本でのコミュニケーションの方法だと思っています。

家族でのコミュニケーションの形はそれぞれどの家庭でもいろいろな方法があると思います。その中の一つに絵本を取り入れること、子どもと世界を共有すること、自分も楽しむこと、を続けていけたらと思っています。

そして、いつか私の知らない素晴らしい本との出会いを子ども達が運んできてくれたらなあと思います。

市原さんは、小・中学校に通う三人のお子さんのお母さんです。本を読むことが大好きな夫は、子どもたちが小さかった頃、寝る前に読み聞かせを欠かさなかったと話してくださいました。

昨年十二月三日(土)、F10子育て学習会
第三回「子育てに本を」ビブリオバトルを開催しました。

ビブリオバトルとは「発表者それぞれが五分間で、自分の選んだ本について話し、質問タイム後、参加者全員で『チャンプ本』(いちばん読みたくなった本)に投票する」という書評合戦です。ここで、市原さんはウォルター・ウイック作「ミッケ」で『チャンプ本』に選ばれました。今回は、西中学校での生徒によるビブリオバトルでのチャンプ本の方にも参加してもらえました。発表者みなさんのご感想です。

長瀬まり子さん
「3びきのかわいいオオカミ」
ユージン・トリビサス作

五分間という限られた時間に本の魅力を伝えることは面白い反面、あつという間に時間が迫る難しさを感じました。多くの人に体験してもらいたいです。

早川ちとせさん
「ぼくを探しに」シェル・シルヴァスタイン作

この本を選んだ理由を伝えるために読み返し、言葉を選びました。そうしたら「なんとなく大好きだった本」が「かけがえのない本」だったことに気がつきました。

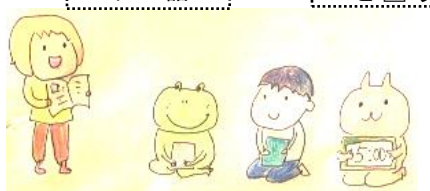
藤井祥瑛さん(西中三年生)
「ツナグ」辻村深月作

初めてのことで緊張したけど、みんなの前で話をしたり、大人の方の話を聞いたり、特別な体験ができました。友達が見に来てくれたので、リラックスして楽しくできました。

川上敏宏さん
「かないくん」谷川俊太郎作

「あのね...こんなところが面白かったんだよ。」本を通して自分とゆっくり向き合う。そしてみんなの「あのね...」が、共感となり広がってゆく、そんな時間となりました。

来年度もビブリオバトルを開催します。
是非、ご参加ください!



ご参加ありがとうございました。

読書タイム

市内の学校・園・施設の
子どもと読書をのぞいてみました

絵本を読み終えた六年生Y君を、大勢の園児が囲む。握手を求められたり、ハイタッチをしたり、さながらアイドルのようである。いつも穏やかで温かいY君の眼鏡の奥の眼差しがますます優しくなり、白い歯がこぼれる。

大合唱である。いつもユニークで明るいK君が読むからこそ、この絵本の面白さが何倍にも広がる。副委員長のYさんは、図書委員二年目で、読み聞かせ上級者だ。園児が好みそうな場面では、じっくりと時間をとって絵を見せ、分かりにくそうな言葉が出てくると、そっと絵を指し示す。読み聞かせて人柄だなあとYさんを見ていてふと感じる。

これは、毎週火曜日の昼下がりの「コアラ組」での光景だ。本校図書委員は、毎週火曜日の昼休みに、隣接するほくぶ保育園に二名ずつ読み聞かせに向いている。

伊深小学校

委員長のK君、今日は長新太作の『へんてこへんてこ』を選んだ。森の中にある不思議な橋。人間は怖がって渡らない。なぜなら、この橋を渡ると体がニョーっと伸びてしまうから。ネコは「ネーコー」イヌは「イーヌー」というように。三ページも読めば、園児たちは橋のからくり

に気づき、その後「ゾーオー」「オーバーケー」の

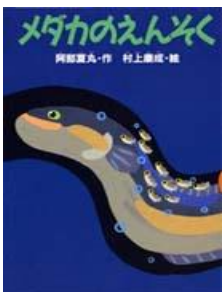
「あんなにモテモテなことって、普通の帰り道。小雪がちらついているが、誰も寒いなんて言わない。読み聞かせの楽しさを味わってもらう以上に、園児から与えられるものは大きいのかもしれない。園児はいずれ入学してくる小学校を身近に感じ、委員会児童は思いやりの心を育む。そんな温かい結びつきが、これからもずっと続いていくよう願ってやまない。

えほん



「テスの木」
ジェス・M・ブローヴァー作
主婦の友社1380円＋税
テスは庭の大きな木が大好きでした。けれどその木は切りたおされることになってしまいます。納得できないテスでしたが…お別れの式をする中で様々な人の思いと出会います。

物語



「メダカのえんそく」
阿部 夏丸作
講談社1100円＋税
ドーナツ型のドーナツいけに、メダカの学校があります。今日はみんなでえんそくにでかけます。いけの周りを一日かけてぐるりと一周！

この本読んでみて!

小説

「空色勾玉」
荻原 規子作
徳間書店952円＋税
神々がまだ地上を歩いていた、古代日本を舞台としたファンタジー。村娘狭也は、ある日突然自分が闇の一族の巫女、「水の乙女」であることを告げられる。あこがれの輝の宮へ救いを求めるが…ドキドキが止まらないおもしろさ。「白鳥異伝」「薄紅天女」とお話は続きます。

大人向け

「世界の都市地図500年」
ジェレミー・ブラック著
河出書房新社
4500円＋税
風景画のようなもの、鳥瞰図、測量し精密に描かれたものなど、500年の地図の発展や作られた意図など、学術的なことはさて置き、手描きという点に先ず驚き、見るだけでも楽しめる一冊です。



図書館クイズの答え
日本では、石井桃子訳「ちいさなうさこちゃん」として出版されました。ふわふわさんとふわおくさんに生まれた赤ちゃんで名前は「うさこちゃん」です。

